

日本語オペラ制作 指定プロット

原案：澤上 篤人

企画構成：公益財団法人さわかみオペラ芸術振興財団、角田 朋子

MITSUKO

青山 光子（あおやま みつこ）は、1893 年、日本でオーストリア＝ハンガリー帝国の貴族ハインリヒ・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵の妻となり、日本初の国際結婚をした女性である。家族の反対を押し切り渡欧。夫の死後はクーデンホーフ家を継ぎ7人の子供を育てる。次男・リヒャルト・クーデンホーフ＝カレルギー伯爵は、パン・ヨーロッパ運動により EU の礎を築いた人物であり、そのため彼女は「パン・ヨーロッパの母」と言われている。

本オペラは彼女の波乱万丈な人生をモチーフとして、架空の人物「光子」の半生に託し、国籍や人種や差別を越え人類がひとつになる平和への志を抱き、周囲と格闘しながらも、愛する夫と子供たちのために生きた日本女性の情熱を描くオペラである。

*このプロットは、青山光子が国際結婚をし、渡欧。夫の死後クーデンホーフ家を継ぎ、子どもを育てあげた。という史実を念頭において作成したフィクションです。各章のエピソードは史実とは異なります。

第一幕 日本との決別

舞台:正月の日本。神社前。大きな鳥居。賑わう人々、神主・巫女たちなど。

【第一場】「正月・明けましておめでとう」

(光子・ハインリヒ伯爵・庶民たち)

神社の境内。獅子舞、お囃子、大道芸人。

和装・洋装の入り乱れる明治の人々が新年を祝う。

光子とハインリヒ伯爵が神社に初詣に来て新年の喜びを歌う。

日本の華やいだ正月の風景。

【第二場】「光子の祈り」

(光子・神主・巫女たち)

境内で光子が一人祈っている。勝手にハインリヒ伯爵と結婚してしまったこと、これから間もなく欧州に旅立つこと…不安は尽きないが、ハインリヒ伯爵の愛を信じて行こうと誓う。そして日本の神々に自分たちの未来を見守って欲しいと祈りを捧げる。

【第三場】「父の怒り」

(光子・父・母・女中)

物凄い剣幕で光子を探しに来た父親。親の許しも得ずに異国人と結婚した事実を知り、怒りに震えている。異国人との結婚は妾になることであり、一族の恥となる。家の名誉に泥を塗ることは決して許せないと光子に自害を迫る。それは家長であり父でもある自分の務めであり、古き日本の慣習そのものだった。光子は激しく父に抵抗し、父からの勘当を受け入れる。

【第四場】「日本からの旅立ち」

(光子・ハインリヒ伯爵)

駆け付けたハインリヒ伯爵によって助けられる光子。母は密かに手荷物を光子に渡す。

まるで駆け落ちのように欧州への旅立ちを決意する二人。見送る人もないが、寂しくはない。

二人は旅立ちにあたり、これから先、希望を胸に振り向かず前へ進もう。お互いを永遠に支え合おうと誓う。

第二幕　　ボヘミア・ハインリヒ伯爵の志

舞台:歴史ある城の大広間・リビング・バルコニーなど

【第一場】「お披露目・歓迎されない花嫁」

(光子・ハインリヒ伯爵・クーデンホーフ家の人々、貴族たち)

ハインリヒ伯爵夫妻の帰国と結婚披露の華やかなパーティー。シャンデリアの煌めきの中、華やかにダンスをする夫妻。

幸せそうな夫妻に隠れ、親族や貴族たちから光子への蔑み・嘲笑い・嫉妬の声が聞こえる。親族や貴族たちの悪意は次第に不協和音を奏でていく・・・

【第二場】「悪の誘惑」

(ハインリヒ伯爵弟・弟妻)

パーティーの中心にいる兄に嫉妬する弟。妻は彼にクーデンホーフ家を真に継ぐ資格があるのは私たちだと囁く。東洋女に騙されるような兄は家長として失格であり、東洋の魔女にクーデンホーフ家を乗っ取られるぞと脅す。次第に弟の目に野望の炎が輝く。弟は妻から手渡された銃を硬く握り、自分が家長になる日を確信する。

【第三場】「兄弟の確執」

(ハインリヒ伯爵・光子・ハインリヒ伯爵弟・弟妻)

一人勉強しているハインリヒ伯爵。国々や民族が争うのではなく、ひとつに統合し、より平和な世界ができないかと考えている。お茶を持ってきた光子は、自分たちのように国や民族を超えた愛・絆はできると励ます。そこへ、ハインリヒ伯爵弟が銃を持って入ってくる。兄弟の闘い。それぞれの譲れない主張。光子の機転で銃が落とされ、ハインリヒ伯爵は弟夫婦に一族からの勘当を言い渡す。

【第四場】10年後「家族の誓い」

(ハインリヒ伯爵・光子・子供たち)

光子と大きくなった子供たちが長椅子に横たわるハインリヒ伯爵を囲んでいる。

父の身体の具合を案じつつも、父から国々と民族間の争いのない世界の夢を聞いている。

異国間の夫婦の家族に強い絆が生まれたように、いつか世界にも新しい繋がりが生まれると歌う。

【第五場】「ハインリヒ伯爵の無念」

(ハインリヒ伯爵)

家族が去った後、ハインリヒ伯爵は自らの命が短いこと、夢に向けて歩みを始める前に死ぬ無念を歌う。永遠に一緒に歩いていこうと誓い欧州に連れてきた光子が、自分亡き後どうなるのかと案ずる。死は恐れぬが、光子への愛が消えることを恐れている自分を知る。

最期の力で光子や子供への想いを記しながらハインリヒ伯爵は息絶えるのだった。

第三幕 ウィーン・光子の決意

舞台:ウィーン・街角 or 宮殿前など

【第一場】「失意・正統相続者は誰？」

(光子・子供たち・ハインリヒ伯爵弟・弟妻・親族)

ハインリヒ伯爵の死後、光子は子供たちを連れ、クーデンホーフ家を継ぐに相応しい教育をすべくウィーンへやってくる。喪服の光子と簡素な装いの子供たち。愛する夫を思いがけず早く亡くした悲しみと不安に震えている。

さらにそこへ追いかけてきた弟夫妻と親族たちが、クーデンホーフ家を光子が継承するのはあまりに非常識だと罵る。弟夫婦は、兄は騙されても一族は騙されないと光子を嘲り、誹り、追い込んでいく。

【第二場】「光子の決意」

(光子・子供たち・街の人々)

そこへ使者が皇帝陛下の親書を光子に運んでくる。亡きハインリヒ伯爵は死の間際、皇帝陛下に遺言の手紙を出していたのだった。伯爵の遺言通りにクーデンホーフ家は光子が継承すべしという皇帝陛下からの親書に、弟夫婦・親族は敗北する。

感激する光子。喜ぶ子供たち。沸き立つ街の人々。退くクーデンホーフ家の親族たち。

光子はハインリヒ伯爵が最期に書いた遺言を受け取る。亡き夫の最後の言葉を読みながら、光子はその夢を子供たちにしっかりと受け継がせ、世界に刻んでいくことを高らかに決意する。